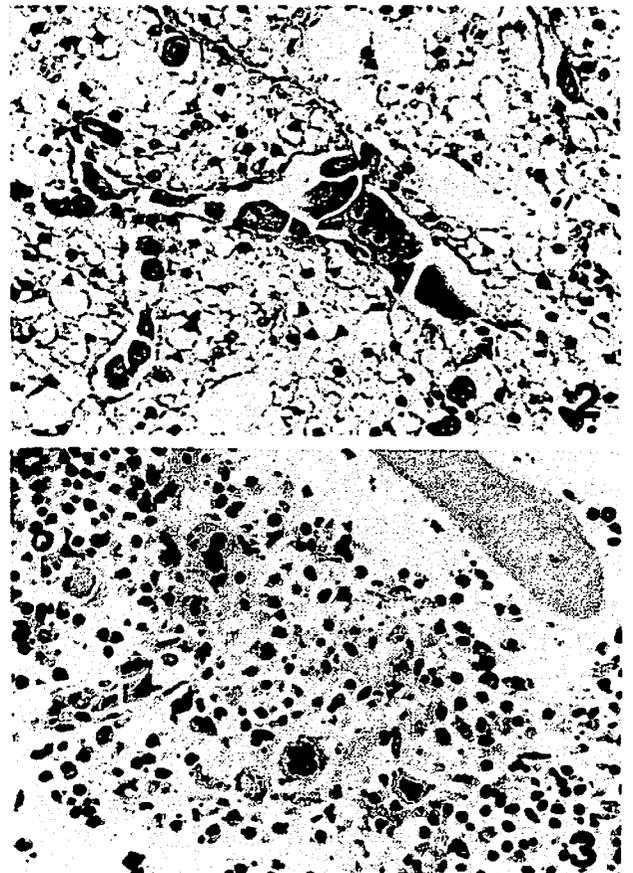
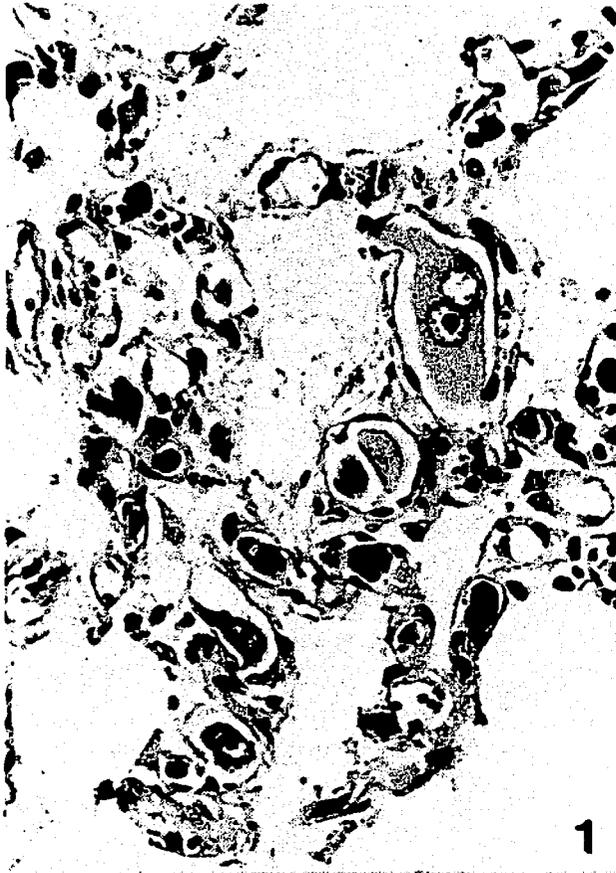


# 犬の肺

日本獣医畜産大学獣医病理学教室出題 第24回獣医病理学研修会標本No.407



動物：犬，ドーベルマン，雌，10.5才，体重25kg。

臨床的事項および剖検所見：本例は、2週程前から口唇と四肢各所の擦り傷様の部位からの出血が止まりにくく、元気、食欲がなくなり、上顎および左指関節が腫脹してきたことを理由に某開業獣医師のもとに上診された。貧血(Ht21~25%)、白血球数増加がみられた。抗生物質、止血剤の投与、輸液に加えて、免疫疾患を疑い大量のdexamethasoneを投与したが、症状の改善はみられなかった。初診後3日目に虚脱状態となり、その翌日血尿を出し、ついに斃死した。剖検(死後17時間)では、腎被膜、直腸漿膜、膀胱粘膜の出血、黄疸、フィラリアの寄生(30~50匹)がみられた。ホルマリンで固定された主要臓器が当教室に送付された。

病理組織学的所見：肺では、肺胞毛細血管内の巨核球様細胞の出現が特徴的であった。この細胞は、明瞭な核小体を有する大きな核と弱好塩基性の細胞質をもち、小さいものは長径15 $\mu$ m、大きく多核のものは長径50 $\mu$ mにもおよぶ細胞であった(写真1, H E,  $\times$ 400)。この細胞は副腎の毛細血管内にも多数存在していた(写真2, H E,  $\times$ 200)。時に核分裂とみられる像も認められた。さらにこの細胞は、肝の類洞、脾の静脈洞、腎の糸球体と皮質毛細血管、心筋線維間と膀胱粘膜下織の毛細血管内にも少数認められた。胸骨骨髓では、巨核球および赤

芽球の増加と顆粒球系細胞の減少がみられ、前述の巨核球様細胞も少数静脈洞内に認められた(写真3, H E,  $\times$ 200)。その他、肝、脾の赤芽球系の髓外造血巣とヘモジリン沈着、肝の中心静脈周囲の線維化、肺胞壁の軽度の線維化など、溶血とフィラリア寄生によると思われる変化がみられた。また、死亡当日の末梢血buffy coat塗沫標本で少数の巨核球様細胞が認められた。

病理組織学的診断：骨髓および他組織内にこの巨核球様細胞の増殖巣がみられないので、本例を白血病あるいはリンパ網内系の腫瘍性疾患と診断する根拠は薄弱であった。絨毛癌の転移を疑うという意見については、ヒトのHCGに相当する胎盤性ホルモンを犬が出しているという証拠が現在までないので、酵素抗体法による細胞内HCGの検出がたとえなされたとしても、絨毛癌と診断する根拠とはならないと考えた。結局、この細胞は骨髓巨核球系の巨核芽球あるいは前巨核球であると考えてのが妥当であろう。したがって組織診断は、肺、副腎その他臓器における巨核芽球および前巨核球の髓外造血像とした。推測の域を出ないが、本例は自己免疫性血小板減少症、自己免疫性溶血性貧血による出血と溶血に対して、著しい巨核球系の髓外造血を示したものであるという可能性が考えられた。